法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

サイボーグ都市・東京

HOQUET, Thierry / オケ, チエリー / 松井, 久[翻訳]

(出版者 / Publisher)
法政大学国際日本学研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
INTERNATIONAL JAPANESE STUDIES / 国際日本学
(巻 / Volume)
15
(開始ページ / Start Page)
151
(終了ページ / End Page)
175
(発行年 / Year)
2018-03-30
(URL)
https://doi.org/10.15002/00021328

サイボーグ都市・東京

チエリー・オケ
（翻訳：松井久）

謝辞：法政大学でこの講演を行う機会を与えてくれた安孫子信教授、そして私をあたたかく迎え入れ、この都市の様々な側面をともに議論してくれたみなさんに感謝したい。同様に、研究チームIREPH [EA 373]とチームのリーダー、ドニ・フォレ氏には、今回の日本行きへの援助を感謝する。このテキストは、パリ・ディドロ大学の私の地理学教授、アンリ・デボア氏が教えてくれたことに負うところが大きい。都市の光景としての東京という問題の土台を築いてくれたのは彼であり、「トマソン」という概念に私の注意を引いてくれたのも彼である。寺島孝一のテキスト、『アスファルトの下の江戸』を発見したのは、INALCO [Paris]でのマリオン・ソシエ氏の授業のおかげである。松井久氏には、翻訳と通訳の作業、そして彼がしてくれた多くの質問、彼がもたらしてくれた正確な情報に感謝する。

「Only in Japan！（日本にしかない！）」これは、新しい言語グロービッシュで、日本のオリジナルなところを見つけたと言いたいときに用いる表現である。しかしそれにはとどまらず、「日本学」あるいは「日本人論」固有のスタイルでもある。

このような見地からすれば、昔から全く変わらない、特異な、他にはない日本精神を特徴づけることに成功することこそ、優れた仕事であると常に考えられている。この場合、チェンバレンが言ったように、日本を「あべこべな世界

Topsy-Turvydom」[1]にしてしまう誘惑は大きい。このような誘惑は古くからある。イエズス会士ルイス・フロイスの1585年の論考を考えてみよう。この論考のスタイルは、対照と対位法を用いる。「*われわれの*家ではムーア風絨毯を敷くが、*彼らの*家では、莚（むしろ）を敷く」[2]。このような項と項の突き合わせへの誘惑は常に繰り返され、最近でも例えばマニュエル・タルディッツに見られる。「パリでは、建物は市民意識とともに通りに沿って並んでいる。東京では、そんなことは気にかけない。数年前建築線についての法的措置が除去された」[3]。

このような誘いに惑わされないためには、類型化を常に避けなければならないだろう。「日本家屋」のような表現でさえきわめて慎重に扱わなければならないだろう[4]。

あるアメリカ婦人の皮肉な話がある。あるイタリア人が「アメリカの国民的なダンス」の魅力を並べ立て彼女を誘惑しようとした。夫人がそのような呼び方に驚いて、「『アメリカの国民的なダンス』ってどのようなものかしら」と聞いたので、イタリア人は答えた。「ケークウォークです」[5]。ヨーロッパからは、*アメリカの象徴、おそらくその本質*であるとさえ思われているものが、アメリカ合衆国では、黒人奴隷の通俗的なダンスでしかないのである。岡倉由三郎（1868-1936）はこの逸話を語り、異文化間のコミュニケーションが失敗に終わったことを示し、日本人についての誤りを正そうとした。彼はまがい

---

1 Basil Hall Chamberlain, *Things Japanese, being notes on various subjects connected with Japan*, Fifth Edition Revised, London, Murray, 1905, pp. 480-2. 翻訳『日本事物誌』、高梨健吉訳、全二巻、平凡社、1969年。日本を逆のものとして提示する安易さは、リヨンの地理学者フィリプ・ペルチエによって告発されている。Philippe Pelletier, *La Fascination du Japon : idées reçues sur l'archipel japonais*, Paris, le Cavalier bleu, 2012.

2 Luis Frois, *Européens et Japonais, Traité sur les contradictions et différences de mœurs*, Xavier de Castro (tr.), Paris, Chandeigne, 1998, chapitre XI, aphorisme 11. 翻訳『ヨーロッパ文化と日本文化』、岡田章雄訳、岩波書店、1991年。

3 Manuel Tardits, *Tokyô, portraits et fictions*, chapitre 9, « Frois 21. フロイス21 », Paris, Le Gac Press, p. 41.

4 Chris Fawcett, *The new Japanese house : ritual and anti-ritual patterns of dwelling*, London ; New York : Granada, 1980. クリス・フォーセットは「日本家屋」について語るのを拒む。類型化とは、極端な異国趣味と現実の美学的な見方を結びつけて、ステレオタイプを伝えることを受け入れることである。

5 Yoshisaburo Okakura, *The life and thought of Japan*, London-Toronto, Dent & Sons, 1913, p. 95.

ものを告発して、本物の日本を提示したかったのである。

しかし、この逸話はその曖昧さそのものによって深い意味を持つ。この話をよく考えてみると、正しいのはイタリア人なのである。アメリカ人のお気には召さないだろうが、ケークウォークは、アメリカの「本質」ではないにせよ、アメリカについて何か重要なことを語っている。したがってこの逸話は、日本学の裏となるような言説、つまり、どのように外国人が*外部から*日本を誤って、誇張して特徴づけるかを素材にしながら日本を語るような言説へと通じる道をわれわれに開く。この言説は、日本について蓄積されたお決まりのイメージやステレオタイプの全体をこの国についての有効な情報源として、真面目に検討するだろう。

もちろんここで「日本学」は問題にはなりえない。そのような言説は永遠なる日本の本質の把握を主張しないからだ。これは、多なるしるし signe についての、つまり、ポスト真実の時代の、ポストモダンの世界における、しるしの消費についての言説である。この「日本学」の裏を、わたしは「サイボーグの見地」と呼び、この見地を今から特徴づけたい。

「サイボーグ cyborg」の名そのものが、サイバネティクス Cybernetics と有機生命体 organism を合成したもので、相容れない二つの項のある共存、二元論を配置する仕方を表している。通俗的な神話の中では、「サイボーグ」という被造物は有機生命体とハイテクノロジー、機械と有機生命体、人間的なものと非人間的なものを結合したものである。こうしてサイボーグは一方で、もはや完全には人間的なものではなく、すでにそれを超えたものである。他方でサイボーグは純粋な有機生命体であることをやめ、自分の環境との、都市構造との、都市との新しい関係を展開する。

あらゆる都市は―東京も例外ではない―、ジョルジュ・カンギレムが「一般有機組織学（道具学）organologie générale」と呼んだものに従って理解することができる。「一般有機組織学」は彼がベルクソン哲学を示すために使った表現である。こうして都市は有機組織化 organisation の一部、つまり有機生命体の生の様態の一部となる。都市の環境は、「外部の器官」あるいは「投影された器官」の全体を構成する。都市は、住居、商業施設、レストラン、図書館とともに、いわば有機生命体の諸機能を延長したもの、あるいは外在

化したものになっている。このような有機組織学の見方に、現象学的な側面が重ねられる。つまり都市は私の期待の地平の一部となり、諸々の可能性を創造する。こうして、サイボーグ存在は二つの世界の間で進化する。一方の世界は、以前の生命の進化の世界で、そこで身体は生命の諸機能を実現する。他方は文化そして技術の進化の新しい世界で、われわれに新しいデザインを与え、われわれの力の感情を増大させてくれる。都市とその交通網、情報の流れは、われわれの能力を増大させ、われわれのリズムを加速させる。つまり、われわれ固有の身体を拡張するのである。しかし、都市もまた、遅らせ、麻痺させる渋滞からも、搾取する違法のダビングからも逃れることはできない。黒川紀章のメタボリズムは、日本の内部空間のデザインが、レストランのようなお店、家の外での生全体を、住宅の自然な延長物として統合していることを思い出させてくれる。マンガも都市におけるこのような個人の拡張を提示する。

東京を光の都市として、超近代的なテクノロジーの都市として称賛するのではなく、そこから進んで、東京についての「サイボーグ」の視点を記述すること、これはそれゆえ様々な二元論についての反省となる。都市を構成する様々な極性―つまり解放と隷属や、固有の身体の増大と依存といった同時に存在する極性―から出発して都市を横断する仕方なのだ。したがって私は、しるしの収集、そして様々な二元性の共存との出会いという二つの方法を交差させて、サイボーグ東京の存在論を提示し、きわめてなじみ深いがきわめて奇妙な、この「東京」と呼ばれる存在の、根本的に対立しあい、矛盾しあい、細分化されたいくつかの側面を把握したいと思う。

I. 東京／江戸

ではただちに、二項対立（二元論）の形で提示されるお決まりのイメージの「スナップショット」を例としていくつか挙げてみよう。東京は人口過密都市であり、日本のメガロポリスの鼓動する心臓部であるが、それと同時に、効果的な交通システム、日本人の市民意識、彼らの高名な組織的振舞いのおかげで、東京は比較的よどみなく流れる都市である。東京は1300万人の人口を持つ都

市であると同時に、住民のそれぞれが「ふるさととよべるまち」[6] でもある。

よりラディカルに言えば、東京は人口過密都市であると同時に空虚な都市でもある。ここで言ってるのは、ロラン・バルトがすでに指摘したような、「見つけることができない中心」や「空虚な中心」ではなく、東京から住民がいなくなる危険のことである。こうして都市計画家たちは、東京が依然として都市であることを確かめなければならなくなる。つまり、東京が、人を飲み込む巨大な郊外とは対照的に、生き生きとした魂を持たないビルや事務所、ホテルなどの単なる集合体ではなく、*人の住む*場所であることを確保しなければならないのだ。1982 年に東京都が出版した「Tokyo tomorrow」と題された東京再開発に関する報告で、目標は東京を「そこに住み、そこで働き、そこで憩」えるような都市に「*再生させる*」[7] ことであるとしるされている。あたかもこれらすべてがすでに失われているかのようである [8]。

このように東京は超近代的な都市であるが、「東京」は徳川幕府の所在地であった江戸が、明治時代初頭 1868 年に改名したものにすぎない。江戸と東京の関係をどのように形容すればよいのだろうか？「江戸」と「東京」を以前、以後と考え、例えば下町気質と新宿の気質の連続性あるいは断絶を研究しなければならないのだろうか [9]？あるいは「東京の下、江戸」と言うべきだろう

---

6 Cf. Préface des auteurs, in « Tôkyô : faits et chiffres », publié par l'Administration de la ville de Tôkyô, 1983 (exemplaire français consulté à la Bibliothèque Nationale de France, cote 16-O2W-300). Cf.『マイタウン構想懇談会報告書』、東京都、東京都企画報道室計画部マイタウン構想懇談会事務局発行、1980 年、p. 3.

7 *Tokyo tomorrow: report / prepared by the My town concept consultative council* ; [ed. by Liaison and protocol section, International communication division, Bureau of citizens and cultural affairs, Tokyo metropolitan government], Tokyo : Tokyo metropolitan government, 1982 : « aims at *re-developing* Tokyo into a town where the people live, work and rest »（p. 83, 強調は講演者）. Cf.『マイタウン構想懇談会報告書』、東京都、東京都企画報道室計画部マイタウン構想懇談会事務局発行、1980 年、p. 29.

8 これは必ずしも新しい論点ではない。マニュエル・タルディッツは前掲書で指摘している（p. 126）。「長い間、江戸と東京は都市 ville であって、ポリス cité ではなかった。両者とも市民を持たなかったのである」アンドレ・ソレンソンは徳川幕府時代の参勤交代制に言及している。このシステムによって武士たちは自領を離れ江戸に滞在しなければならず、人為的な人口を生み出した。André Sorensen, *The Making of urban Japan : cities and planning from Edo to the twenty-first century*, London-New York : Routledge, 2002, p. 17.

9 Philippe Pons, *D'Edo à Tôkyô, Mémoires et modernités*, Paris, Gallimard, 1988, p. 162.

か？これは2005年に出版された寺島孝一の『アスファルトの下の江戸』の前提であった。この前提によれば、東京と江戸の関係は異なる二つの生活様式として記述される。今日の贅沢な、ハイテクノロジーな生活に、江戸のより質素な生活が対置され、寺島は江戸の生活を再構成しようとする。この探求の道筋をたどると、東京と江戸の関係は継起 succession の関係（古い／新しい、の年代的なもの）ではなく、重層 superposition の関係（上／下、の位相的、地層学的なもの）になるだろう。このとき同じ都市の二つの名称の関係は、ある位相、つまり場の同一性の下で、以前／以後を記述するのではなく、ある同時性、つまり時間の同一性の下で、上／下を記述するだろう。

こうして、東京／江戸という対を通して、時間と空間の結合の問題が立てられる。われわれは、ベルクソンとは違い、時間を空間化する、あるいは空間を時間化する必然性に出会う。この時間と空間の必然的な結合は最終的にベルクソンに対する答えを提供する。この結合を与えるのは日本の昔話『浦島太郎』である。もし、空間を旅すること、亀の招きに応じて様々な場所を横断することが、玉手箱の中に時間を蓄積し、時間が流れないようにすることであるなら、同じく次のように言えるだろう。同じ場所を占めること、ここにとどまること、それは同時に互いに衝突しあう異なる時間を横断することである、と。

このような時間と空間の関係は同様に、都市を横断する様々な方法によっても翻訳される。乗用車、電車、タクシー、自転車、歩行者など、*移動手段の衝突*について、あるいは都市のリズムに合わせる様々な方法について語ることができる。

東京では、公園のような決まった場所の外で散歩するのは不可能であるように見える。ブロードウェイの42丁目を歩き回ることはできる。例えば1933年のミュージカル映画『42番街 42nd Street』が行ったように、ニューヨーカーたちはこのことを自分自身の表象に統合しさえする[10]。歩行者、ここではタップダンサーになるためにペンシルベニア州アレンタウンから出てきた若い娘ペギー・ソイヤーは、アメリカのメガロポリス固有のリズムを取り入れると

10　1933年の映画の中での象徴的なナンバー “Come and Meet those Dancing Feet”、そしてこの映画の「ミュージカル」版（1980）が付け加えた1935年公開の映画『Go into Your Dance』のタイトル曲を参照のこと。

同時に、自分のステップ（歩み）を見つけ、自分の歩き方を生み出し、自分をもう一度作り直すのである。しかし、ペギー・ソイヤーのような人物像は、日本の文脈には合わないように思える。東京はマンハッタンではないし、人々はそこでタップダンスを踊ることもなく、銀座がブロードウェイになることはないだろう。東京の散歩者を特徴づけることをあきらめなければならないのだろうか？公園の特定の場所に散歩者を押し込んでおかなければならないのだろうか？現実はちがう。東京でも、歩行者のありそうもない人物像に出会うのである。

谷口ジローは、『歩くひと』でそのような歩行者を描いた。この作品は、ぶらぶら歩き、「ゆっくり時間をかける prendre son temps」[11]、まったく驚くべき散策の仕方を表現している。都市で散歩する技術とは、空間を使って時間を構成する、ある奇妙な方法のことである。散歩が気の赴くまま明確な目的もなく歩くことであるなら、それは何よりも先に、あるリズムであり、ある時間性である。そこでは瞬間が膨張する。というのも、ぶらぶら歩く人間は時間を気にしたりしないからである。道に迷うこともあれば、速足の時もある、結局夜にならないと帰ってこないこともある。

散歩者は、人間の行動とその直接的な目的を超えた自然なリズムにさらされているのである。散歩者は、むせ返るような暑さ、降りつける雨、夜明けや夕暮れなどと折り合いをつけなければならないのだ。

散歩者は自分自身の力だけを頼りにし、誰も当てにはしない。彼の力を増大させ、歩くスピードを加速させるような技術的な補助も持たない[12]。例えば、メガネが壊れたり、躓いて転んだり、といった、歩く最中に起こる偶然の出来事にも身をゆだねる。彼の散策は様々な道の形とも折り合いをつける。きわめて狭い路地や、住宅の屋上に通じる階段、車道の脇の狭い歩道など。散歩はこうして、ある仕方で、都市をある時間に組み入れ、遊んでいる子供、下

11　フランス版（Casterman, 1995年）の裏表紙には次のように記されている。「歩くひと？それは現代の日本で、生きることに時間をかける prend le temps de vivre 人である。彼は立ち止まって、鳥を見る。並外れた夢想家であるが、人は彼の、いわば時間の中で凝固した、日常的な振舞いしか知らない」。

12　よしずを運ぶ途中、歩道橋の下に暑さから逃れる日陰を見つける場面を参照のこと（「第15話　よしずを買って」）。

校中の制服姿の女子中学生、お年寄りなど、さまざまな年齢層、条件にある人々と出会わせてくれる。この出会いは様々な生命の種との出会いでもある。木々や草、桜や、ウサギや鳥、昆虫などの野生の生命と出会い、自分の犬との散歩のように人間に飼われている生命とも出会うのだ。木と出会うことは、ある場所とある時間をつなぐことでもある。『歩くひと』で、ある桜に言及する一コマがある。「この桜の木はわたしが生まれるずっと前からここに立っていました」(「第 12 話　桜の寝床」)。桜と会うことは、ある深い、集合的な、自然な時間に接続することなのである。この時間は私の個人的なリズムを超えていて、毎年、季節ごとに、私と会う約束をする。

別のスタイルではあるが、「Tokyo　Reverse」の実験を考えてもよい。これはシモン・ブイソン Simon　Bouisson とルードヴィッヒ・ジュイーリ Ludovic Zuili の手による「slow tv」の番組 (9 時間 10 分続く) である[13]。この番組では、ある男が東京のいろいろな道を、逆向きに歩きながら散策するところが映像に収められる。そして放送時、この映像は逆向きに流されるのである。その結果、中央に位置する登場人物が前に進みながら散歩しているように見えるのに対して、彼の回りの人々はすべて後ろ向きに下がっていくように見えるのだ。この映像は散歩のフィクションのようなものを示し、その陶酔感は、フランチェスコ・トリスターノ Francesco Tristano のピアノのインプロヴィゼーションの熱狂的なリズムによってさらに増大される。都市の景観の展開に加えて、ここで、私が採用しようと思うサイボーグの視点からすると驚くべきなのは、一連のパラドックスである。

逆さまに歩いている男が、まっすぐ歩く。

その男の歩みは自然ではなく、ある強いられた体勢を取らなければならず、足をどのように置くか考えなければならないが、最終的に、この男だけが正しい方向に向かい、自由であるように見えるのである。優美にダンスしているように見えるのである。おどろきなのは、他の人々のすべての姿勢の方で、あたかもカントが哲学にこうむらせたようなコペルニクス的転回を宇宙全体に押し付けている。

つまり、至高なる歩行者の視点が受け入れられ、彼と彼の奇妙なバレエを

13　https://vimeo.com/88907972.

中心にして、その周りで最終的にすべてが有機的に組織されるのである。

しかしこれは、2020年のオリンピックのために東京に押し寄せる観光客の見地に立って見なければならないことでもある。キャップを逆向きにかぶって、屈託のない笑顔をおめでたく浮かべているガイジンだけがまっすぐ歩く。そして、このガイジンの居心地がいいように、彼が慣れるように、他の人々、東京のすべての住民たちは後ろ向きに歩く手はずを整えざるをえない。「Tokyo Reverse」がわれわれに示しているのは、意味（方向）を欠き、最終的に、都市という見世物としてしか、観光客の悪ふざけにゆだねられた巨大な遊園地としてしか役に立っていない東京である。あたかも彼ら観光客たちの無限に続く自撮りの崇高なる景観であるかのようだ。

II. サイボーグ都市の真正性

東京での散策によってわれわれは、東京の使い捨てのシンボルの不十分さとも直面する。東京タワーや東京スカイツリーは、愛着を生むくらい、感情に訴えるシンボルなのであろうか？パリ全体がエッフェル塔というアイコンに要約されるのと同様、東京を要約しているのだろうか？

グローバル化した市場での競争に入り、都市は同定可能な本物のシンボルを生み出さなければならない。こうして「マスコット」あるいは「ゆるキャラ」がブームになり、大掛かりなコンテスト、「ゆるキャラ®グランプリ」まで毎年開催されるようになった。

例えば、鹿の角をはやしたブッダ、奈良の「せんとくん」、城の帽子をかぶった大阪の「ゆめまろくん」、熊本の「くまモン」など、今日ではおよそ1200に上ると推定されている。しかし、例えば愛媛の「みきゃん」や今治の「バリィさん」のように地方ではうまくいっているものが、東京で機能しうるのだろうか？首都、電気の都市をこのレベルに置くことができるのだろうか？同じカテゴリーでプレーすることができるのだろうか？

真正性 authenticité の問題が東京でどのように機能するのか見てみよう。まず、都市のしるし signe の消費は、渓斎英泉と歌川広重の『木曽街道六十九次』（1834-1835）や『東海道五十三次』の浮世絵の古典的な様式と結びついている

ことが指摘される。さて、これら典型的な風景画に関して、時間性の衝突は完全である。広重の『東海道五十三次』の一枚目の版画『日本橋　朝之景』を取り上げ、日本橋の現在の光景と比べてみよう。

日本橋は東海道だけでなく、五街道すべての出発点となっている。この日本の道路網の起点は今日、手のほどこしようのないほど複雑に絡みあっている。日本橋は江戸時代の大八車であると同時に今日の東京の巨大な高速道路でもある。すべてが、絡み合った糸のただ一つの結び目の中にある。

懐古的視点に立つ人は、日本橋は、1964 年真上に高速道路が建設され、台無しになってしまった、と言うだろう。しかし、サイボーグの視点に立てば、日本橋について新しい見方が可能になる。日本橋は、複数の時間性を同時に提示するこの日本の都市の典型的な結び目になっているのである。

東京の様々な美術館で行われた浮世絵版画の展覧会は、これら「たゆたう世界のイメージ」（浮世絵）と現代日本の関係の複雑さを示している。

サントリー美術館で行われた歌川広重（1797-1858）の回顧展は有名な二つの連作『名所江戸百景』と『六十余州名所図会』[14] を展示した。この展覧会でサイボーグ訪問者を驚かせたのは、浮世絵版画とともに、現在の同じ場所の写真も展示されていたことである。太田記念美術館で開催された展覧会『大江戸クルージング』では、北斎の『富嶽三十六景』を中心に展示が繰り広げられたが、この展覧会でも同じ手法がとられた [15]。現在と過去が突き合わせられ、同じ場所を同じ角度から描いたものだと認めることはまったくできない。今日、水道橋から富士山を見ることはもはやできないのである。東京の表象という観点に立つとき、この過去と現在の風景の突き合わせの意味は何なのだろうか？

他方で、浮世絵の歴史の視点そのものからも、この時間性の対立が提供される。西洋で最も有名な広重、北斎から出発して、小林清親（1847-1915）の作品を検討してみよう。清親の作品には広重や北斎の版画の魅力がないとすれば、それは近代化がすでに始まっていたからである。富士山の風景画の画一化されたイメージから日本は抜け出したのである。清親の東京の風景画が

14　2016 年 4 月 29 日から 6 月 12 日まで行われたこの展覧会では、日本化薬株式会社元会長・原安三郎（1884-1982）のコレクションが展示された。

15　2017 年 7 月 1 日～ 7 月 23 日開催。http://www.ukiyoe-ota-muse.jp/exhibition/cruising

描いているのは、街灯に照らされる夜の橋で、ガス灯の光が日本のシルエットを浮かび上がらせる。清親は自分の浮世絵版画で、例えば夜の京橋を描いた広重の古典的な風景画を、ホイッスラーの夜の風景と交雑させるのである。

同様に清親は、広重に見られたモチーフを用いた大丸の版画、あるいは夜の日本橋の版画で、電線を描いている。両国の火事を描いた作品[16]では、日本家屋に起こった惨事を見ることができる。西洋の建物だけがのこり、原子爆弾のフィルムにつきまとう廃墟のシルエットを予示している。同じトポス topos（主題、場所）―西洋の建築物が抵抗する一方で、日本の伝統的な建築物は倒壊する―が、1923年フランク・ロイド・ライト設計の東京の帝国ホテルの有名な写真に見られることを指摘しておこう。この建物が都市を破壊した関東大震災に抵抗したとしても、それはその技術が優れていたからであろうか？あるいは単なる地形上の偶然で、この場所の地面が他より柔らかく、地震の衝撃波を弱めたのだろうか[17]？いずれにせよ、1968年にこの建物を取り壊し、東京は清算を済ませたのだろう。つまり、「近代建築に対する日本の負債」[18]から解放されたのだろう。

ここでサイボーグの世界における真正性の問題も立てられる。観光客は本当の東京を探し求める。しかし、それはどこで見つかるのか？従業員5名以下の小規模な店の数が1997年の93000店舗から2007年の63000店舗へと減少した。かつて商店街は多くの人でにぎわい、小さな商店からなる都市の伝統的な動脈で、中には何代も続く店もあった。現代、このような「商店街」はどうすれば生き残れるのだろうか[19]？グローバル化した資本主義世界の中で、着物屋やせんべい屋、蕎麦屋は何を表象しているのだろうか？このような伝統的な店、

---

16 『明治十四年二月十一日夜大火』。

17 ライトの建物の抵抗の解釈（それが純粋に偶然だったのか否か）については、次の研究を参照のこと。René Kural, *Architecture of the information society : the world city expressed through the chaos of Tokyo* (trad. Kenja Henriksen), København : Royal Danish academy of fine arts : School of architecture publ., 2000, p. 59.

18 Franco Purini, « introduction », in Livio Sacchi, *Tôkyô. Architecture et urbanisme*, Paris, Flammarion, 2005, p. 7.

19 Keiro Hattori, Sunmee Kim, & Takashi Machimura, « Tokyo's "living" shopping streets: the paradox of globalized authenticity », in Sharon Zukin, Philip Kasinitz, and Xiangming Chen (eds), *Global cities, local streets : everyday diversity from New York to Shanghai*, New York (N.Y.) : Routledge, 2016, pp. 170-194.

そして商店街は、別の世界へ開かれた窓であるように思われる。つまり、それらは、すでに過ぎ去ってしまったように見える時間に属する風景を垣間見せ、それによってわれわれは突然その過去へと入っていけるように思える[20]。しかし同時に、本物であることそれ自体が、グローバル化した資本主義システムの中では、使い捨てられる消費物になったのである。このことは、麻布十番や下北沢[21]といった「商業の動脈」の真正性とは何かを問い直す。現代は、これらの地区がミシュランのガイドに掲載される時代なのである。

人々はこれらの地区に、「本物の経験」、典型的な日本の経験であると同時に十分国際色を感じさせてくれるような経験を探しに行く。そこからこれらの地区がぶつかる戦略上の困難が生じる。世界のいたるところで行われているようなグローバル化を「模倣する」ことに満足せず、これらの地区の商店は、「その地域独特な」戦略を採用した。つまり、かれらの商売に、ある「真正性」[22]を残そうとしたのである。困難は、「本物」はすぐさま投資家の標的に、投機の対象になり、その真正性を失う危険にさらされることにある。

麻布十番の事例はとりわけ興味深い。この地区の建設は江戸時代にまでさかのぼる。以前は「港区のチベット」、つまりきわめて交通のアクセスが悪い地域だった。現在、六本木のすぐそばに位置し、富裕層向けの商業観光地の中心となっている。いくつもの大使館が近くにあり、多くの外国人が住んでいることも有利な条件となっている。「秘密地帯」麻布十番は、常に「発見」される危険にさらされてきたが、とりわけ2003年に近隣に六本木ヒルズ森タワーが開業し、麻布十番駅ができたことによってこの危険は深刻なものとなった[23]。アクセスが良くなった今、どうして他からの隔絶という戦略を取れるだろうか？

下北沢界隈は麻布十番とは異なり、ボヘミアン的な雰囲気があり、より若い世代向けの地区で、インディペンデントな日本の音楽文化の中心と考えられ

20　Hattori et al, p. 171.「懐古趣味の現実逃避主義者にはぴったりな場所」。

21　麻布十番は南北線と大江戸線からアクセス可能。下北沢は都心から麻布十番より離れたところに位置し、小田急線と京王井の頭線が交わる。

22　Hattori et al, p. 181.

23　麻布十番駅は、2000年9月南北線開通により開業、同年12月大江戸線全線開通により乗換駅となる。

ている。しかしこの地区もまた高級住宅化され、地代が高騰し、チェーン店（マクドナルド、ケンタッキー・フライド・チキン、ドコモなど）が続々と開業する脅威にさらされている。

こうしてこれら「本物の」地区は、サイボーグ世界では「真正性」が求められる商品になった以上、自らの成功の犠牲者になる脅威にさらされているのである。

真正性はシンボルの問題も提起する。技術的な創造性によって、東京は過去の建物の痕跡を必要としなくなった。「都市の光景」という概念は、資本の流動性の増大が大都市同士の競争を生む世界で、動的な資本を惹きつける目玉商品になる。ここから、東京の顔を見つける必要が出てくる。これについて、今日、東京の顔となる「名刺代わりの signature」建物を建てる役割は、例えば銀座のシャネルやルイ・ヴィトンや、表参道のプラダやトッズの店舗など、官庁ではなく高級品店が担っていることが指摘される。2008 年に竣工された、モード学園（ゲームデザイン、ファッション、アートなどの専門学校）の新宿の 203. 65 メートルもの高さの新校舎、コクーンタワーを考えてもよい。国家の計画より、民間資本が都市を変え、都市に以前に比べて誇示的な特徴を与える。

しかし、未来の都市は同様に、その失敗、つまり検討されたが実現されることはなかった可能性によって、興味深いものとなる。マンフレッド・タフーリ（1935-1994）は言う。「失敗に終わった作品、実現を見なかった試み、断片、こうしたものが、〈テクスト〉としての威厳をもつべく、完成された作品においては隠されてしまう問題を偶々起こすこともあるのではないか[24]？」こうして失敗は、輝かしい成功と同じくらい、人間の試みの真正性を明らかにする。成功はこの試みに固有な困難をあいまいにし、隠してしまうのである。さまざまな時間同士の衝突、そしてさまざまなリズム同士の衝突が、ここで導きの

---

24 Manfredo Tafuri, *La Sfera e il labirinto : avanguardie e architettura da Piranesi agli anni '70*, Torino : G. Einaudi, 1980, pp. 18-9 : « Un'opera fallita, un tentativo irrealizzato, un frammento non pongono, per caso, problemi nascosti dalla compiutezza di opere assurte alla dignità di 'testi' ? ». 翻訳：マンフレッド・タフーリ『球と迷宮』、八束はじめ、鵜沢隆、石田寿一訳、PARCO 出版 , 1992 年 , p. 23.

糸となり、われわれは未来の考古学の主題となる問いと出会う：過去はそれにとっての未来、つまりわれわれの現在をどのように表象したのか[25]？日本建築は、このような挫折した未来のヴィジョン、実現されたが何にもならなかった建築計画、未来にとっての過去の一つの痕跡、生じなかったものの現実に名前を生み出した。「トマソン」という概念である。読売ジャイアンツに莫大な年俸で入団した野球選手、ゲーリー・トマソンに由来する名称「トマソン」は、きわめて高価であるが、何の役にも立たないもの、つまり超芸術 hyperart を表す。この概念は、芸術家赤瀬川原平（1937-2014）が、芸術の商品化に対立する中で生み出したものである。赤瀬川によれば、トマソンあるいは超芸術トマソンとは、コンセプチュアル・アートの一つで、機能を失っているが、都市環境の中に保存されている、何の役にも立たないある構造の残骸である。多くのトマソンの写真が雑誌『写真時代』に掲載された。

トマソンは高級品店の逆である。高級品店はお金が都市にできることのシンボルである。トマソンはある名残であるが、最近のものである。無用なものだ。現代のものだが捨てられ古臭くなっている。美しさも機能もない。それゆえトマソンは記念碑の逆でもある。記念碑は輝かしい出来事を想起し祝う機能を果たしているのに対して、トマソンは不条理な名残で、そこに何があったのかみんな忘れていたことを示している。トマソンは、新しい都市で記憶の喪失のしるしになっている。トマソンは、未来の考古学、とはいっても決して生じることがなかった未来の考古学を具現している。

III. 東京・地下

東京での散歩の問題は、様々な空間での散策の様態の問題、そしてそこで出会う様々な時間、同じ場所に蓄積され圧縮された時間の問題であった。いまから、地表を離れ次元を変えて、この仮説をテストしたいと思う。

東京と江戸の関係の問題は、すでに述べたように、地上と地下の関係、あ

25　未来の考古学は 1996 年に開催された展覧会のテーマになった。『未来都市の考古学』、1996 年 7 月 24 日～ 9 月 16 日、東京都現代美術館；9 月 25 日～ 11 月 4 日、広島現代美術館；11 月 12 日～ 12 月 22 日、岐阜県立美術館。展覧会図録は鵜沢隆によって監修された。

るいは表面と深さの関係の問題であった。ある通りの断面図の観察が明らかにするように、東京は様々な深さで生きる都市である[26]。これらの深さはそれぞれ個別研究の対象になっていて、その使用方法も多様である[27]。例えば、ある程度の深さにある、デパ地下（デパートと地下を圧縮した語である）のあり方を考えてもよい。ここではかなり高価で、相当贅沢な食料品が消費されている。たとえばメロンや桃はヨーロッパ人にとって考えられない価格である。食料品の消費とは別に、食料品の生産にも出会う。千代田区にあったパソナO2の驚くべき地下菜園である。銀行金庫跡に開設され、土を使わず、肥料を水に溶かした培養液によって栽培する養液栽培を導入していた。そこでは様々な野菜が栽培され、稲田さえあり、企業主たちが写真撮影のためスーツのままで稲刈りをしていた。

さらに下に行くと、アーケードになる。より一般的にいえば、熊谷組の「オデッセイア21」構想が提示したように、地下は、新しい商業センターへの投資のための場所となる。

もっと下に行くと、地下はもちろん地下鉄にも使用される。地下鉄は、栗山貴嗣が東京の地下鉄網を3次元で再現したインスタレーション『東京動脈』のような、芸術的思弁の対象となる。さらに、情報などのネットワークに通常使われる他、高速道路、駐車場、貯水トンネルや伏流水といった、より特殊な施設としても使われる[28]。

地下は、表面を詰まらせているものを排出する場所である[29]。こうして地下の機能は、詰まりの諸問題を解消することとなる。第一に、深さを使って交通

---

26 このような断面図については、以下の論文を参照。H. Takasaki, H. Chikahisa, Y Yuasa, « Planning and mapping of subsurface space in Japan », *Tunnelling and Underground space technology*, 15(3), 2000, p. 290. この断面図は次の研究に再掲されている。Sabine Barles et Sarah Jardel, « L'urbanisme souterrain : Étude comparée exploratoire », Rapport de recherche pour le comte de l'Atelier Parisien d'Urbanisme, Avril 2005, p. 17.

27 Kenji OKUYAMA, J. NISHI, T. SEIKI, « Modernology study of underground urban space in Japan », in *Agenda and prospect for the turn of the century*, actes de la 8e conférence internationale sur l'espace souterrain.

28 « L'urbanisme souterrain », 2005, p. 16.

29 « L'urbanisme souterrain », p. 24.「都市の地下は、地表の制約（うまく適応していない道路網や、様々な種類の流れの間の衝突など）から解放されており、しばしば流れにとって理想的な場所であるように思える。循環の全体あるいは一部を地下に移すことによって、都市化された空間に固有なうっ血を制限することができるだろう」。

を分離する[30]。一般に東京の表面は自動車のものだ。歩行者に通りの横断を保証するため、高い場所にある歩道橋を、あるいは、商業利用（ショッピングアーケード）も可能にする、地下にあるトンネルを使う。しかし、自動車は利用可能な地表すべてを覆い、ピロティの上の高速道路によって、空中や水中の一部を植民地にした後、地下にも潜ることになった[31]。

地下は雨水も排出する。東京の巨大な地下貯水地、「首都圏外郭放水路」を見てみよう。「首都圏外郭放水路」は「G-Cans Project」あるいは「地下神殿」とも呼ばれ、埼玉県に建設された。河川の水位が越流提の高さを超えると、深さ 65 メートル、直径 32 メートルの 5 本の立坑を水が通りトンネル内に流入し、江戸川へと排水される。おわかりのように、サイボーグ都市は、ある機械装置が連続的に機能しなければ生存できない都市でもある。「地下神殿」は、水に浮かぶヴェネツィアを維持するピロティや防波堤の等価物のようなものである[32]。

ある必然的な弁証法によって、地表の諸問題への解答であるように思われた深い地下も同じ困難に直面することになる。第一に、地下の投資目的の利用を考慮すると、地下の価格も高騰する[33]。さらに、汐留のジョン・ジャーディーの建物が、屋外にいるような地下と紹介されたように、驚くべき価値の転換が起こる。地下自身が地上と思われたいのである[34]。

さらに地下世界は様々な意義を与えられている。第一に、地下は、そこから危険が生じる場所だ。『Underworld』（地下）というタイトルの子供向けの本は説明する。「世界で最も人口密度の高いこの近代都市は、地下から突然姿

---

30 ウジェーヌ・エナールに帰せられることもある原則である。

31 こうして 2014 年 3 月 23 日、港区の新橋から虎ノ門を結ぶ 900 メートルの自動車専用トンネルが開通した。このトンネルを毎日 38,000 台以上が通過し、交通渋滞を解消すると想定されている。

32 Cf. *Cyborg Philosophie*, 2.20. 左に挙げた本の中で、私はキェルケゴールとシモンドンを参照した。Soren Kierkegaard, *Miettes philosophiques* (1844), in *Œuvres complètes*, Éd. de l'Orante, 1973, t. 7 p. 91 ; Gilbert Simondon, *Du mode d'existence des objets techniques* (1958), Paris, Aubier, 1989, p. 250-1.

33 地下の価値について、パリの事例については次の研究を参照。« L'urbanisme souterrain », p. 28.

34 汐留の広告は次の研究に再掲されている。« L'urbanisme souterrain », p. 53 : « You won't believe you're underground when you check this out ».「ここに来れば地下にいるなんて思わないだろう」。

を現す危険に」、とりわけ地震と火山活動に備えなければならない[35]。「防災の日」(9月1日)とその日行われる地震の防災訓練について言及される。同時に、地下40メートルに位置する地下鉄の駅は、「地震や核戦争の際に避難場所として使用できるように、食料や寝具が詰め込まれた貯蔵庫が備えられている」と紹介されている。東京の地下深く、それはポスト黙示録的なものが準備されている世界でもある。ジャック・デリダが分析した古代ギリシャ語 *Pharmakon* がそうであるように、地下は、薬であると同時に毒でもあるように思える。危険が下から来るとしても、救済もまた下から来る。地下は地上より安全である、と記されることもある[36]。1995年に起こった阪神大震災では、90%の地上の建造物が破壊されたが、地下の建造物の破壊は10パーセントにとどまった。以上のような議論が、地下の利用に際して持ち出される[37]。

東京の地下はうわさ、あるいは「都市伝説」の対象となる。そのような「都市伝説」を立証することは、私の役目ではないが、それらは、地下世界をめぐって蓄積された幻想を証言しており、効果的なしるしとして機能する。

たとえばこんな話だ。国会議事堂前駅の千代田線のホームは東京の中心の秘密の通路によって直接議事堂につながっている。これは昔の防空壕で、1950年代に地下鉄の駅に変わったらしい。

あるサイトでは、以前の東京の中央郵便局と東京駅をつないでいた「昔の地下通路」に言及している。以前は郵便物の運搬に使われていたこのトンネルは、20世紀初頭に建設された。1927年に開通したもっとも古い東京の地下鉄、銀座線よりも前だ。永田町、霞が関、大手町、丸の内にある官庁の建物、そして皇居と日枝神社をつなぐ同じような通路があったとのことである。このサイトの説明によると、この秘密トンネル網には、「国立国会図書館も含まれ、

---

35 Jane Price, *Underworld*, trad. *Sous nos pieds : mystères et merveilles des profondeurs*, illustré par James Gulliver Hancock, Bruxelles, Casterman, 2013, p. 79. この本には「危険は下から来る」(« Le danger vient d'en bas ») という題の東京の地下についての章がある。

36 「一般に地下は地上より安全である」。Cf. *Earthquake survival manual*, le Tôkyô metropolitan government, mars 2003, p. 11. この文は « L'urbanisme souterrain » で引用されている (p. 23)。

37 Cf. Takafumi Seiki, Junji Nishi, Yoshinori Kikuchi, « Classification of underground space and its design procedure in Japan », in *Indoor cities of tomorrow, Villes intérieures de demain*, 7e conférence internationale de l'ACUUS, Montréal, 1997.

1200万もの書籍、定期刊行物が地下8階にわたって収められているとのことである」[38]。

このような都市の神話は、東京の地下の「謎」についての専門家、秋庭俊によって広められた。大江戸線のトンネルは、東京都がそれを公共の地下鉄にすることを決定する前から存在していて、第二次世界大戦後、万一の核攻撃に備えて建設されたより広大な複合施設の一部なのだそうだし、有楽町線も同様に軍事目的で建設されたとのことだ。他にも、東京西部、立川の国営昭和記念公園の地下に秘密基地が存在すると思弁を巡らせる人たちもいる[39]。

地下東京は、秘密の東京でもあり、軍事的な東京でもある。昨日の東京（第二次世界大戦時の東京）でもあるが、明日の東京（ポスト黙示録的な東京）でもあるのだ。

IV. 徴候としての廃棄物

日本人は自分たちの糞便をステーキに変えるだろうか？この問いは挑発的で気分の悪いものである。どのようにこの話を聞いたのか覚えていない。ある同僚がそんな記事を指摘してくれたのだろうか？そうかもしれない。私としては、細かいところまで吟味して、誠実に自分の探求に取り組みたい。

「糞ステーキ」またの名をうんこバーガー（英語では turd-burger あるいは poop-burger）の研究は、廃棄物のリサイクルの専門家、池田光行教授なる人物によって行われている。多くのブログ、ニュースサイト（Fox News はそのうちの一つ）に投稿されている記事と動画によれば、池田は下水汚泥から糞便に由来するタンパク質を抽出し、次にバクテリアを熱で殺して、パテにし、それに赤の着色料と大豆を加えて食べてもらえるようにする[40]。この「試作」段階では、生産コストはまだ高いが、生産量が増大するに伴いコストは下がるそうである。今のポスト真実の時代、このようなことすべては、ばかばか

---

38 http://www.lemadblog.com/architecture/les-mythes-urbains-du-tokyo-souterrain/

39 この考えにはある程度の信憑性がある。というのも、内閣府の災害対策本部予備施設であり、緊急時には政府の救助拠点として機能する立川広域防災基地の近くにこの公園は位置しているからである。

40 https://www.youtube.com/watch?v=u1N6QfuIh0g

しいが現実のこととして、日本の可能な定義として紹介される。「うんこバーガー」の話はもっともらしい見かけをしているがデマで、ミームやコンピュータ・ウィルスのようなものでしかない、とそのペテンを告発するサイトを見つけるには手間がかかる[41]。もっとも、よく見てみると、その「ルポルタージュ」には変なところがたくさんある。たとえば、池田教授は説明するとき、マニキュアを塗った女性の手の形をしたポインターを使う。これは、たとえ日本人にとっても、少しやりすぎではないだろうか？

この話とその成功はわれわれに何を語るのだろうか？「日本」という語が、もっとも気ちがいじみた研究と同義語だということだ。人々はそれが日本だということだけですべてを信じようとする。日本人の食習慣に関することすべてについて、またすべての領域における前衛的な研究に関してはとりわけそうである。日本は実験の爆発的な発展の拠点であることが期待されている。日本は技術フェチ、つまり、技術によって生み出されたものである限り、すべておこない、すべて*を飲み込む*準備があるとも思われている。日本の研究者のイメージは、自然、良識、現実から完全に切り離された、常軌を逸した技術礼賛者と同義語となった。この排出物から作られたステーキのビデオは日本の消費社会の肖像でもある。いかなるものでも売り、食べさせる過剰な資本主義である。しかし、単なるスカトロ衝動を超えて[42]、うんこバーガーの話が証言しているのは、日本に対するわれわれの両義的な感情である。絶対的な魅力を持ちながら、相対的な嫌悪感を与える話、愛と不快を両方引き起こす話なのである。研究開発に依拠した日本産業の成功[43]と同じく、うんこバーガーも革新につい

---

41 ペテンの告発についてはとりわけ次のサイト参照。http://www.salon.com/2011/06/23/japan_feces_meat_viral/

42 同じ種類のものとして、若きナイジェリア人たちによって尿から生み出された電力がある。これは、*Nature Protocols* にも掲載され、尿細胞から作られた幹細胞、より正確にいうと、*尿の中で見つかったが*、腎臓から来た皮膚幹細胞で、再プログラム化されIPS細胞になっている。以下のサイトを参照のこと。http://articles.timesofindia.indiatimes.com/2012-11-12/science/35068470_1_gas-cylinder-hydrogen-gas-generator
http://www.wired.com/wiredscience/2012/12/urine-stem-cells/

43 例えば次の研究を参照。Jean-François Sabouret, *Japon : la fabrique des futurs*, Paris, CNRS Éditions, 2011, p. 55 :「日本の探求は、実際、第一に研究開発である。それは富、雇用、輸出を生み出す。日本の政治の中心そのものにある。ある科学技術の領域（ニッチ）あるいは前進によって売り上げの大きな増加を記録できるなら、日本はそれに殺到する」。

ての話である。つまりこれは、リサイクルを、廃棄物の量の制限を語り、食料の自給の問題を語っている。資源が以前も現在も、そして未来も乏しい世界で、生き残るすべを学ぶ、これも日本なのである。

しかし、ペテンの下にある象徴を解読すると、この都市の神話は何よりも、東京がいかに廃棄物の上で維持され、構築されているかを語っていることがわかる。

上で引用した1983年の公式ガイドには次のように記されている。「埋めるごみの最終的な量を減らし、東京都は埋め立て地を廃棄物の最終処分場として有効に利用しようとしている。1977年10月以降、東京湾中央防波堤の外側に位置する、広さ314ヘクタールの埋め立て地が使用されている」[44]。少し後には次のような記述が見られる。「埋め立て地で処理される廃棄物は、一般ごみ、産業廃棄物、そして下水沈殿物のような都市施設の廃棄物である。埋め立て地に送られるこれらのごみの総重量は、1981年度は311万トンであった」[45]。

東京はそれゆえ、天文学的な量の廃棄物を常に吐き出す都市なのである。何トンもの廃棄物が焼却されるが、何トンもの廃棄物が不燃物で埋め立て地へ送られる。さて、1983年の時点ですでに状況は悲劇的だった。「人口過密の首都では、十分な埋め立て地を見つけるのはきわめて難しい。現在の処理方法では、羽田近郊で建築が進められている新しい埋め立て地を計算に入れても、埋め立て地は1990年には廃棄物でいっぱいになるだろう。この状況を打開するため、東京都はすでに対策を検討している」[46]。

人間の排泄物の処理についても都のガイドでは一節設けられている。「東京で人間の排泄物の収集は月に二度、27万2900世帯に対して、容量の小さな（1,8キロリットル）吸引機搭載のトラックを使って行われている。排泄物の最終処理が行われるのは海である。1981年度、およそ100万キロリットルの排泄

---

44 « Tôkyô : faits et chiffres », 1983, p. 187.

45 « Tôkyô : faits et chiffres », 1983, p. 188.

46 « Tôkyô : faits et chiffres », 1983, p. 189 :「1. 収集された可燃物をすべて焼却するための新しい焼却場の建設。2. 他の埋め立て地の整備。3. 新しい科学技術の研究、実験の開始。たとえばサイズの縮小のための高温での溶融、不燃物や焼却に適さない廃棄物のリサイクル、そして堆肥技術の発達など。4. びん、かんのリサイクル、再利用の奨励。足立区の3万世帯をモデル地区として指定する。」

物が海に投棄された」[47]。

サイボーグ都市は、自らの廃棄物を水の上に建設された土地へと変える一方、何万トンもの有機的廃棄物を生み出し海へと返す。サイボーグ都市は、陸と海から、コンクリートと肉からできている。昔の錬金術師のように、自分の排泄物を金に変える秘密を見つけたのだ[48]。

おわかりのように、サイボーグ東京は、大地／水の曖昧な関係を維持する都市の問題でもある。東京は、隅田川、神田川という二つの河川の間に建設された都市であった。さて、東京への訪問者がおそらくもっとも驚くのは、水路が引かれ、高速道路に覆われ、元々あった詩情から引き離され、不愉快で陰鬱な下水路に変わっていることだろう。このように理解されると、東京では、オートピア―至高なる車の世界―が実現していると言えるだろう[49]。丹下健三や磯崎新のせいなのであろうか？隅田川の両岸は嵩上げされ、コンクリートで覆われた。散歩者はしばしば、東京が水と河岸を捨てて、その舞台性のある部分を失ってしまったことを嘆く[50]。

しかし、東京は水と特殊な関係を持っていて、「水みずしさ aquosité」つまり住民の水に対する感情的な関係を促進しようとする、フランス人の都市計画家たちの報告書でモデルとして引用されるほどである[51]。彼らはイル＝ド＝フランスで水への関係が欠如していることを指摘し、インスピレーションを東京

---

47 « Tôkyô : faits et chiffres », 1983, p. 190.

48 ここで、ユーゴ―が『レ・ミゼラブル』で排泄物によって表される財産について書いた箇所を再考してもいいだろう。

49 この概念を展開したのはレイナー・バンナムである。Reyner Banham, *Los Angeles : the architecture of four ecologies*, 1974.

50 例えば、Philippe Pons, *D'Edo à Tôkyô, Mémoires et modernités*, Paris, Gallimard, 1988, p. 370-1. ポンは隅田川の河岸が1950年ころにはまだ持っていた魅力の例として次の論文を参照する。Robert Guillain, « La rivière à remonter le temps », in *Des Villes nommées Tôkyô*. 永井荷風の『すみだ川』（1909年）を参照してもいいだろう。翻訳者ピエール・フォールにとって荷風のテクストは「名所の伝承を小説に翻案したもの」であった。Cf. NAGAI Kafû, *La Sumida*, 1909, tr. fr. Pierre Faure, Paris, Gallimard, 1975, p. 121.

51 Cf. André Guillerme, Gilles Hubert, Mitsukuni Tsuchya, « Aquosité urbaine : la mise en valeur du patrimoine hydrographique francilien par référence aux rivières de la préfecture de Tokyo », Université de Paris VIII, Institut français d'urbanisme, URA-CNRS-1244, Champs-sur-Marne : Laboratoire Théorie des mutations urbaines, 1992.

に求める。こうして妙正寺川沿いの哲学堂公園の整備計画に興味を向けた[52]。

もう一つの例が親水公園、つまり水と親しむことを目的にした公園である。不衛生で放棄された空間を横切る「下水路に、ある種の水みずしさ aquosité」を再び与えるシステムである。この下水路に浅瀬の澄んだ水の新しい分水路を合流させ、この空間に季節折々の植物を植えて再開発したのである[53]。1970年代の東京には親水公園の例がいくつかある。古川（1200m）親水公園は18世紀の古い水路に、1973年建設され、旧江戸川の水を地下水路で引いている。小松川境川（3200m）親水公園は1979年から1980年にかけて建設され、アスレチック施設も備えている。この親水公園は、ささやく水（夏）、湧き水（秋）、静かな水（冬）、流れる水（春）といった季節のテーマに合わせて整備されている。現在、新東京百景の一つである。こうして東京は下水路を日曜日の散歩者たちの天国へと再転換するモデルを与えている。親水公園のモデルが、かつての「ビーバーの川」、現在は都市の発展に伴いパリで埋められてしまっているビエーヴル川再開発に提案されている。

V. 結論：東京の場所と時間

私は、様々な時間あるいは様々なリズムが同時に提示されるような契機を、今回導きの糸として用いた。

時間については、谷口ジローが提示する木はわれわれを過去の時間へと接続するものだったし、江戸は過ぎ去ってしまったものではなく、今日もアスファルトの下に存在しているだろう。

リズムについては、Tôkyô　Reverse の例は様々な歩き方を明らかにしていたし、多忙な都市の中で、自分のリズムに従う散歩者を谷口ジローは描いていた。

---

52 Cf. « Aquosité urbaine », p. 35. 妙正寺川第一調節池。

53 Cf. Jasmine Pinard, « Shinsuikoen, Des égouts au Parc De Loisir », In *Looking Back to the Future: Proceedings 10th International Conference of the IAPS*, Delft (Pays-Bas), 1988 ; Augustin Berque, « Le sens de la rivière. Nature et simulacres à Tôkyô, fin de siècle », in *La Maîtrise de la ville. Urbanité française, urbanité nippone* (colloque du centre de recherches sur le Japon contemporain, Royaumont, 1988), Paris, EHESS, 1994, pp. 45-54.

東京は様々な緊張が横断する都市である。シンボルの真正性と商品化の緊張、浮世絵の日本のアイコニックな風景と今日の日本のイメージの緊張。シンボルを生み出す必要と愛着を生み出す必要の間の緊張。同一性がマーケティングの問題である以上、商業上の戦略と真正性の間の緊張。

地表と地下、そして大地と水の緊張。

また、食料を見つけ、それゆえ資源を豊富に採取しなければならないが、有機物、無機物の廃棄物を生み出すので、それらの処理方法を見つけて常に排出しなければならない都市には、同じく現実に差し迫った緊張が横断している。東京は、くずを未来への期待へと変え、排泄物を金に変える方法を常に発明しなければならない都市なのだ。

さて、東京の様々な場所と時間について結論するため、二つの要素を取り入れたい。

第一に、場所同士の衝突という要素である。東京の超近代性はふるさとの沈黙を背景にしてのみ理解される。人口統計学者はみんな言う、日本の巨大都市は、田舎の過疎化の進行を背景に、人口を増大させていると。日本は空洞化する一方で、巨大都市は膨張し続ける。

古代ローマで、オウィディウスは『恋の技法』の中で、田舎にいることを楽しめるのは、遠くで都会が聞こえる場合だけだ、と書くことができた。今日の東京では、状況が逆である。都会での生活が可能であると考えられるのは、ふるさとの地平から出発する場合だけである。

このことは、例えば小津安二郎の有名な『東京物語』（1953）や山田洋二によるリメイク『東京家族』（2013）のように、東京にやってくる地方の人間というモチーフを呼び寄せる。しかし、このモチーフによって、対称となるモチーフが見えなくなるようなことになってはいけない。地方に戻ってくる、結びつきを失った東京人というモチーフだ。このモチーフの原型をわれわれに与えてくれるのは木下恵介の見事な『カルメン故郷に帰る』（1951）である。

この木下の映画は、登場人物カルメンを通して、日本の二つの景観の間の緊張関係のサイボーグ的な論理を明らかにしている。一方ですべての倒錯の場所としての大都市があり、他方に、帰属する場所、心の場所、単純さの場所としてのふるさとがある。カルメンは両親の村、「実家」に帰ってきて、こ

れら二つの世界の衝突を生み出す。

もう一つは、時間性の対立という要素である。春の桜の光景ほど、見た目は無時間的なものはない。しかし今日、皇居のお堀に沿って、千鳥ヶ淵に桜を見に行く人なら、誰でもあるおどろきを、あるいはある落胆を感じるだろう。この場所はソメイヨシノやオオシマザクラといった様々な種の桜で有名である。しかしこの光景でびっくりするのは、桜に電線が備え付けられ、薄いピンクのフィルムをかけられた照明によって際立たせられることである。夜は、いわば色の乱痴気騒ぎになる。同様に京都円山公園の桜、シダレザクラも夜はライトアップされ、散歩者は騒がしく酔っ払いながら花見を祝う。

谷崎潤一郎が愛した陰は、われわれが清親の版画で見たガス灯の魔力によって、完全に消え去ってしまった。

谷崎は日本の近代化を描きながら、電気の侵入、そしてこの技術に日本人が夢中になったことによって乱れてしまった日本の伝統に言及している。

秋のある日、谷崎は石山でお月見をしようと思った。しかし、彼がその準備をしていたとき、新聞でベートーヴェンの『月光』を流すため、そこら中に拡声器が取り付けられているのを知り、お月見をやめてしまう。「拡声器も困り物だが、そう云う風ではきっとあの山の方々に電燈やイルミネーションを飾り、賑々しく景気を附けてはいないかと思ったからである」[54]。同じような事情で、それより数年前に、須磨寺の池での十五夜の月見が台無しになった。池の回りを何色もの電飾が華やかに取り巻いていたのである。「月はあれどもなきが如くなのであった」[55]。

花見なら、秋の月見に耐えられないものを耐えることはできるだろうか。そうかもしれない。

電飾に照らされた桜の下での花見、この絵葉書に使われる写真、あるいはこのありきたりなイメージで、私は東京の探索を終わりたい。私が描きたかったサイボーグ世界はポストモダンの世界で、生きているものと人工的なもの、オリジナルとコピー、魅力的なものと化け物じみたものが完全に分離不可能

---

54 谷崎潤一郎、『陰翳礼讃』（1933-1934）

55 *Idem.*

になっている。そこでは未来への希求が過去へのノスタルジーと出会い、しるし signe を帯びすぎたある現在を描く。これらのしるしは常に解釈の余地を残している。